小學校入學檢定を終へて（二）

附屬小學校主事　堀　七　藏

一

抽籤に當ると、一も二もなく入學が出來たやうに考へる方が多いのには、當事者として頗る困却する。何しろ四百三十三人から七十人の當り籤、六人に一人の割合で籤に當つたのであるから、保護者がお喜びになるのも無理はない。殊に我が兒ほど知能の發達も身體の發育もよいものがないと思つてゐる親心としては、誠に當然である。

しかし事實は、まだ檢定によつて三人半に一人しか入學出來ぬのである。七十人から二十人しか入學出來ないのであるから抽籤で入學候補者となつたからとて、もう鬼の首でも取つたように考へられては困る。當事者からいへば、わざ〳〵一日に檢査出來るだけの多くを當り籤となし、入學候補者として檢定するのは、その中から成るべく身體の健全に發育したもので、知能もよく發達したものを入學させることを目的となすことは勿論である。悉くを入學させるための檢定ではない。三日間に亙つて行ふ入學檢定は、抽籤によつて入學候補者となつたものについて、身體・精神の發達を成るべく公平に檢定し比較してその中から入學者を決定する目的を以て行はれるのである。この點は保護者は勿論、幼稚園の保姆も十分考慮せられねばならぬ。

二

抽籤がまだ行はれない前から、入學檢定に對する準備の方法をお尋ねになる方が多い。これは至極結構なことである。

一體入學檢定に對する準備は、あつてないやうなものであり、無いやうで有るのが小學校の入學檢定準備である。

入學檢定の當事者としては、世間で考へるやうな檢定準備ならばない方がよいと考へる。小學校に入學してから學ぶべき文字の知識や、數計算などの知識は入學檢定を受けるには役立たぬ。小學校入學の檢定は滿六歲兒としてどれ位知能が發達してゐるかを比較することを目的として行はれる。どれ位、文字の知識をもつてゐるか、どれ位、數の計算が出來るかを檢するのはその精神でない。從つて入學檢定を受けるために、幼稚園や家庭で大急ぎに片假名を教へるとか、平假名まで教へてゐるといふやうな準備は不要である。また二十まで數へることを教へるとか、百まで數へることを教へるとか、或はまた一、二、三……の數字を教へることも、１２３……等の數字を知らせてゐるといふやうな準備も不要である。大人から急ごしらへに觀念內容の伴はない入智慧をなすやうな檢定準備ならば寧ろ行はないがよい。

三

入學檢定の際に一言も答へないで、次から次と通る幼兒がある。その中に、人前ではにかんでどうしても口を開かぬといふ子供がある。幼稚園に入園する頃ならば、かゝる幼兒があつても左程問題ではないが、小學校に入學する位の幼兒で、一言も口を開かないものがあれば、それは普通でない。それで他人からものを問はれたならば答へるやうに躾けることが檢定の一の準備である。「家族にはおしやべりして困る位であるが」といふ子供で、往々檢定のとき一言も發せぬといふものがある。雉子も鳴かずば擊たれまいで、一言も返答せぬのでは檢定することが出來ない。それで檢定に不合格となることが多いから、この點に於ては檢定の準備が必要である。しかし普通には特別な準備が必要でない。それを親が八ケましく、「檢定で何かきかれたらよく考へてお答へするのですよ」と、教訓した爲めに、一言も發言せずに檢定を通過するといふ子供が時にはある。「どうして答へなかつたの」と、檢定の後に母親が尋ねると、「ダツテ　お母さまがよく考へて

返事せよといつたから、私よく考へてゐたの、すると先生はよし次へといつたからどこでも答へられなかつた」といふ實例がある。これは答へることについての準備が大人の考で却つて害をなしたことになる。

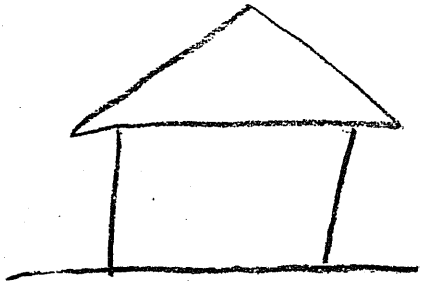
また曾つて某大臣のお孫さんが某附屬小學校入學檢定を受けたときの話である。「このボールを出來るだけ遠くに投げて御覽なさい」といはれて、その子供さんは、「そんな小さなボールは投げない。地球のやうに大きなボールなら投げる」といつて、檢定官をてこずらせ、また「先生のやうなものには答へない」といつて、檢定官を面喰はせたものがある。これは極く特殊な實例であるが、はたから書生などが下らぬ笑談をいつたのが災ひしたものである。かゝる入學檢定の準備はしない方がよいこと勿論である。

また今年の檢定で、四肢の動きを檢するために、五人位づゝ走らせたとき、一人泣いた兒があつた。その兒は精神發達のテストをなす檢定室に入つても泣き止まず、終りまで一言もいはず泣通した。他の子供に妨げとなるので、檢査室外に出さうとしても動がない。檢定を受けるのだといつて泣いてゐる。それではといつて檢定を受けるやうに、すゝめても矢張檢定を受けないと泣いてゐる。誠に妙であつた。しかし「走つたときまけた」といふ口惜しさが原因であつたことが後で分つた。大人の考へ及ばぬところに子供に意地があるから、檢定を受ける準備にも氣をつけねばならぬ。

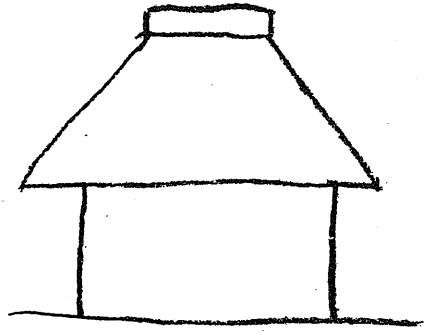
四

小學校の入學檢定は入學せんとする兒童の知能を檢定するもので、はたからぞれ位、いろ〳〵の知識を授けてあるかを檢査するのが目的でない。それにもかゝはらず、父兄や保姆が入學檢定の準備として、いろ〳〵の知識を授ける人が多い。それは大變なあやまりである。大人が急ごしらへに、こんなことが出るかも知れないからと、所謂山をかけて檢定の準備をなすことが多い、けれどもそれは悉く檢定者の方には入智慧があることが分る。所謂鸚鵡返しに答へるのが子供で

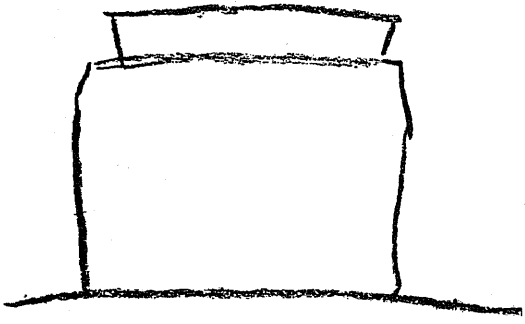
（4）



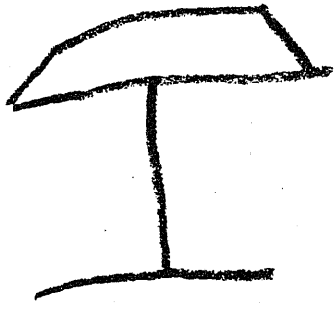
（1）



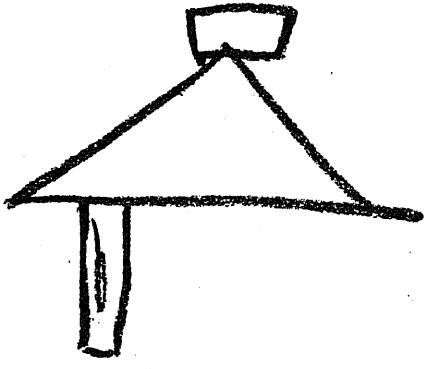
（5）



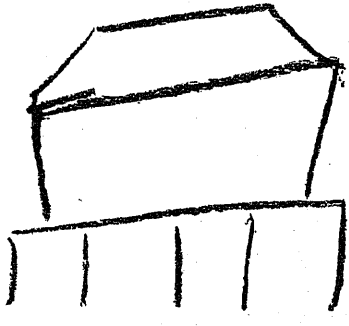
（2）



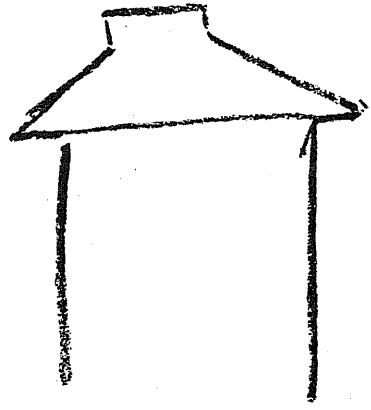
（6）



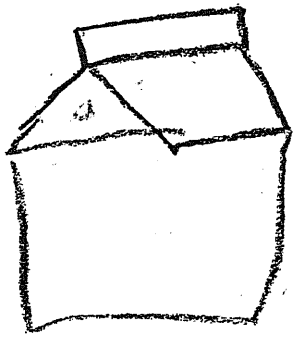
（3）



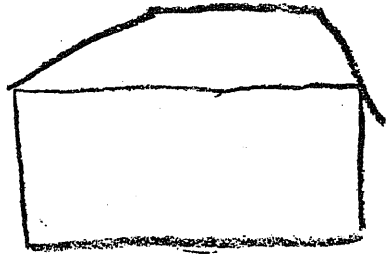
(7)



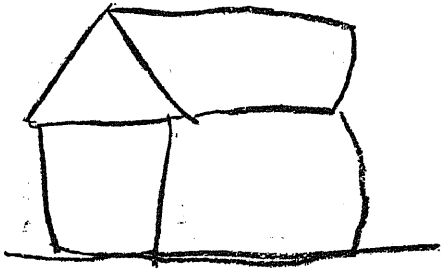
(10)



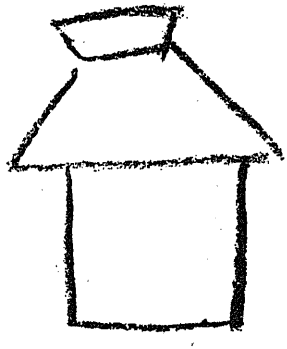
(8)



(11)



(9)



(12)

あるから、検定者の出した問には答へずして、他のことを答へてゐる場合が多い。また「教はつて來たか」と尋ねると、子供は正直であるから、「お母さんにおそはつた」とか、幼稚園の先生におそはつた」とか、答へるので、折角親や保姆が急ごしらへに教へたのが害になることが頗る多い。検定者の方には控室にまで行かなくとも、保姆が三日間も、五日間も出張して検定のすんだものから検定の問題をきいて、次の準備や入智慧に苦心して居ることが、被検定幼兒を通して分る位である。

今年の検定に於て「繪を見せますからよくみてゐてその通りの色のクレヨンでお書きなさい」といつて(1)圖の如き繪を三十秒ばかりよく觀せて置き、それを記憶によつて描かせたことがあつた。すると(1)の如く範畫の通りに書けたものは素直に検定者の方で觀せた繪をよく見て記憶し、その通り表現したものである。ところが(2)から(12)までの如きいろいろ違つた畫を描くものが多い。觀たのと違はないかと、念を押せば、書き直さうとするものもあるが、よく觀なかつた爲に記憶が、明白でないのが多い、中には(2)の如く數年前の検定に出たものを練習させられたので、それを書くといつたものがある。數年前、簡單に電氣スタンドの線畫を描かせたのを丹念に教へたものであり、子供はそれに氣をとられてゐるので、今新に觀せられた範畫を全く觀なかつた爲に、(2)の表現となつてゐる。しかも數年前の電氣スタンドとも異なるところが面白い。検定者の方では面白いが、折角の準備が災したことは保姆の罪か親の罪か。

(3)でも(4)でも、また(5)から(12)までも、描く子供の心理に立入ると、それ〴〵理由があり、そこに保姆や親の間違つた準備のために災せられた點が多いに相違ない。殊に(4)と(9)とは色の見分けが出來てゐない點に注意を要する。色の見分けが唯出鱈目であるか、または色盲のためであるか。

この實例でも分るやうに「家を描くのだからこんなに書け」と準備するならば、その準備が非常に災いする。しかし與へられた繪をよく見る態度習慣を養ふことや、色を見分ける力や記憶せるものを素直にその儘表現する力を養ふやうな準備は無論大切である。